

『引き渡された方をめぐって』ヨハネ18:28-40

18:28 それから人々は、イエスをカヤパのところから官邸につれて行った。時は夜明けであった。彼らは、けがれを受けないで過越の食事ができるように、官邸にはいなかった。

18:29 そこで、ピラトは彼らのところに出てきて言った、「あなたがたは、この人に対してどんな訴えを起すのか」。

18:30 彼らはピラトに答えて言った、「もしこの人が悪事をはたらかなかったなら、あなたに引き渡すようなことはしなかったでしょう」。

18:31 そこでピラトは彼らに言った、「あなたがたは彼を引き取って、自分たちの律法でさばくがよい」。ユダヤ人らは彼に言った、「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」。

18:32 これは、ご自身がどんな死にかたをしようとしているかを示すために言われたイエスの言葉が、成就するためである。

18:33 さて、ピラトはまた官邸にはいり、イエスを呼び出して言った、「あなたは、ユダヤ人の王であるか」。

18:34 イエスは答えられた、「あなたがそう言うのは、自分の考えからか。それともほかの人々が、わたしのことをあなたにそう言ったのか」。

18:35 ピラトは答えた、「わたしはユダヤ人なのか。あなたの同族や祭司長たちが、あなたをわたしに引き渡したのだ。あなたは、いったい、何をしたのか」。

18:36 イエスは答えられた、「わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしに従っている者たちは、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。しかし事実、わたしの国はこの世のものではない」。

18:37 そこでピラトはイエスに言った、「それでは、あなたは王なのだな」。イエスは答えられた、「あなたの言うとおり、わたしは王である。わたしは真理についてあかしをするために生れ、また、そのためにこの世にきたのである。だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」

18:38 ピラトはイエスに言った、「真理とは何か」。こう言って、彼はまたユダヤ人の所に出て行き、彼らに言った、「わたしには、この人になんの罪も見いだせない」。

18:39 過越の時には、わたしがあなたがたのために、ひとりの人を許してやるのが、あなたがたのしきたりになっている。ついては、あなたがたは、このユダヤ人の王を許してもらいたいのか」。

18:40 すると彼らは、また叫んで「その人ではなく、バラバを」と言った。このバラバは強盗であった。

●序論

今日の個所で、イエス・キリストが十字架へと向かわれる受難の歩みがあります。ここでは、ユダヤの宗教的指導者たち、政治的権力者ピラトがまず挙げられます。彼らはそれぞれ、自分たちの立場や都合、自分の利益や保身を考えながら行動し、言葉を発しています。それはすなわち、イエスを十字架につけようという意思が働いている。

一方で、そのすべての出来事の中で、ただおひとり、神の御心に従って歩み続けた方、それが私たちの救い主イエス・キリストです。

今日も結論をお話しておきましょう。

そこに、どんな人のどんな悪意や策略、それは悪魔的な痛みと悩みが見えようとも、そのすべての中にも、神さまはイエス・キリストを通して救いのご計画、御業を完成されたのだということです。

同時に、今私たちも、どんな状況下におかれても、神さまはその救いのご計画の完成へと道を備えておられるということを覚えます。だからクリスチャンは、ひたすら神さまを見上げ、信頼して歩んでいきたいのです。

●本論

I. 自分の悪意を正当化する人

18:28 それから人々は、イエスをカヤパのところから官邸につれて行った。

時は夜明けであった。彼らは、けがれを受けないで過越の食事ができるように、官邸にはいなかった。

総督の官邸に連れて行ったユダヤ人たちは、すでに自分たちの仲間内でイエスを死刑にすべきだと決めていました。…でも死刑に値する証言はありません。

マタイ26:59-60 さて、祭司長たちと全議会とは、イエスを死刑にするため、イエスに不利な偽証を求めようとしていた。そこで多くの偽証者が出てきたが、証拠があがらなかった。

だから、ピラトに「あなたがたは、この人に対してどんな訴えを起こすのか」と問われても、「もしこの人が悪事をはたらかなかったなら、あなたに引き渡すようなことはしなかったでしょう」という答えしかしていません。

なんとか、力技で死刑に持ち込むための行動だったとわかります。

そこまで思いを抱いて総督官邸まできたのに、

「彼らは、けがれを受けないで過越の食事ができるように、官邸にはいなかった」…とあります。彼らの決めた律法で、異邦人の家に入ると宗教的に汚れるとされ、過越の祭りに参加できなくなると、「過越しの祭りを大切にする自分たち」という姿にこだわりを見せています。

ここでわかるのは、そういう状況下で、

①自分の正しさやきよさの評価は、守ろうとする姿です。

そこには、「信仰」という名目のもとで、自分に都合の悪い人を遠ざけ、また人を裁くありさまあるということです。

②自分の手ではなく、ローマの権力者ピラトを利用してイエスさまを処刑しようとしたのです。

18:31 そこでピラトは彼らに言った、「あなたがたは彼を引き取って、自分たちの律法でさばくがよい」。ユダヤ人らは彼に言った、「わたしたちには、

人を死刑にする権限がありません」。

はっきりとイエスさまを殺そうとする意図をあらわしながらも、それをするのは自分たちではなく、ローマの公的権力を利用しようとしているのです。

このする賢さの中に、人の罪の闇の深さを感じます。

ここにあるのは、人間の罪深さの闇です。自分は宗教的に正しくあろうとしながら、裏では他者を裁き、責任を他に押しつけ、自分の体裁を守ろうとする心…。私たちの心にも、状況の中で、同じような自己中心、責任逃れ、偽善が潜むことがあることを注視しなければならない、ということです。

Ⅱ. 決断を人任せにする人

後の時代、クリスチャンに向けたパウロの言葉で、こんな言葉があります。

あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしておいて自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。（ローマ12:2・新共同訳）

これは、今を生きるわたしたちクリスチャンへも大切なチャレンジです。

そういうことを覚えると、先ほどのユダヤ人たちのありさまは、自分の正しさを認めてもらおうと求めるが、肝心の神さまご自身と、その御心を忘れたありさまに映ります。

そしてここで見るピラトもそうです。

彼はこの裁判の過程で、イエスには何の罪もないことを繰り返し確認します。

それでも彼は、この後、ユダヤ人たちの顔色を窺い、暴動や面倒な問題を避けて自らの立場を守るために、イエスを十字架に渡す決断をするのです。

「わたしには、この人になんの罪も見いだせない。」と。

彼はイエスを解放する代わりに、バラバを釈放するという妥協策を取ろうとします。それは、民衆の怒りをかわし、自分の責任を回避するための方法でした。

正しいと分かっているのに、人の目や自分の立場、世間の反応を恐れてしまう。

私たちの日常にも、同じような場面は少なくありません。

信仰に生きることは、時に周囲の目や評価を超えて、主の前に誠実に生きることです。

そのために、そこで、神さまに助けていただくこと。それが信仰の歩みです。

Ⅲ. 赦しと恵みを経験する人

バラバは強盗、殺人者であり、ローマの支配に対する反乱者でした。

ピラトは、イエスを釈放したくて、例年の祭りの恩赦の慣習を持ち出し、「バラバかイエスか」と民衆に問うたのですが、その問いに対するユダヤ人たちの叫びによって

彼らの強いイエスさまへの殺意が余計に明らかにされてい升。

18:40 すると彼らは、また叫んで「その人ではなく、バラバを」と言った。
このバラバは強盗であった。

このバラバは、私たちの姿でもあります。本来十字架にかかるべき罪人はバラバであり、私たちです。しかし、イエスさまはわたしたちを愛し、わたしたちの罪を負い、神のご計画の中で、十字架を負うてくださったのです。

わたしがそうなのです。イエスさまから遠く離れた場所で罪の中に生きてきた。けれどもそんなわたしに触れてくださり、気づきと悔い改めの機会を下さり、そして救ってくださったのです。

私ばかりではありません。教会にいるわたしたちが皆そうでしょう。

改めて、ユダヤ人指導者も、ピラトも、民衆も、自分中心、自分の都合と保身で動いています。

しかし、それでも、そのすべての出来事を通して、神さまの人の救いのご計画は着実に進んでいます。そのことがわかる御言葉がここにあります。

18:32 これは、ご自身がどんな死にかたをしようとしているかを示すために言われたイエスの言葉が、成就するためである。

この言葉は、イエスの十字架は偶発的事件でも人間の陰謀の結果でもなく、神の救いの計画の中心であることをヨハネは伝えています。

おわりに)

このあと、ヨハネによる福音書から、この後も十字架の物語が続いてまいります。

悪意と闇が圧倒的に見えるこの世界を、どの時代のクリスチャンも、そして現代のわたしたちも経験しています。

けれども忘れないでください。聖書ははっきり語ります。

ヨハネ1:5 光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。

だから、わたしたちは、この世界の争いのただなかで、悩みと貧しさと問題のただなかにあっても、なすべきことは変わりません。光なるイエスさまの福音を証言するのです。

そこにこそ救いがある。癒しがある。主の御業があると知ることができるからです。聖書ははっきりとこういいます。

1 コリント1:23-24 しかしわたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える。このキリストは、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものであるが、召された者自身にとっては、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の力、神の知恵たるキリストなのである。